

テーマ「家族の由来に関する誤解～ゴリラから学んだこと～」

家族を取り巻く不幸な事件事故が相次ぎ、また家族崩壊が進んでいるといわれる昨今、ゴリラ研究の第一人者、京都大学の山極寿一教授がゴリラを通じて「家族」を語ります。ディスカッサントには、障害児教育に取り組む花園大学の渡辺実教授、それに堀場製作所の堀場雅夫最高顧問、佛教大学の高田公理教授、同志社大学の山口栄一教授のレギュラーメンバーが加わり賑やかな討論となりました。

☆スピーチ

スピーカー

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科科長 教授）



ゴリラの研究が専門なんですが、人間から一歩離れて、人間の社会を眺めることを長年してきました。すると、そこに意外なことが見えてきた、というお話をきょうはさせていただきたいと思います。

それは、家族なんですね。家族というのは、おそらく当たり前のよう人間社会の中に存在していて、とてもそれなしでは考えられないということをご経験だと思います。また、家族は、人間に非常に特殊なもので、特殊なものであるからこそ、実は、近代が生み出した文化の産物だと考えられているフシもあるかと思ひます。しかし、そうではない。そうではないと考えると、やはり、家族の起源というのを古く遡って考えなくっちゃならないということになります。

とになります。

資料の「現代家族の諸問題」とタイトルをつけた図をご覧ください。最近、家族の危機ということが非常によくいわれます。その危機は、例えば図に書いておりますように、三つ四つに分類できるのでは

現代家族の諸問題

社会経済環境

核家族化
新興住宅、マンション化
単身赴任
男女共同参画
産休、育児休暇
年金問題
コンビニ
個食化
中高年自殺

グローバル化

少子高齢化

結婚と離婚

同性結婚
高齢結婚
独身と同棲
子なし婚
アラフォー問題
非婚
定年離婚
おひとりさま
介護

社会関係と教育

家庭教育と学校教育
イクメン、イクジョイ
非行
いじめ
ひきこもり
DV

IT化

コミュニケーション

空気が読めない
話べた
親子の断絶
世代の断絶
地域共同体の崩壊

はないか。それは、▽社会経済環境▽結婚と離婚▽社会関係と教育、そして▽コミュニケーションで、その流れとしては▽少子高齢化▽グローバル化▽IT化などといわれたものに、どうも関係がありそうなんですね。こうした危機というのは、家族という形態が、どうも、ひょっとすると現代の社会に合致しなくなっているんじゃないか。じゃあ、家族って、そもそも何のためにあるのかということになってきます。この図は、後のワールドカフェの時に、この図に立ち返って話し合っていたらいいとお見せしたわけです。

人間にしか家族はない

- 鳥の家族とは違う
- オオカミの家族とは違う
- サルや類人猿に家族はない

人間の家族は生涯にわたって継続する

複数の家族が集まって共同体をつくる

まっけて共同体を作る。この点が人間の特色といえます。その家族っていうのは、見返りを求めずに奉仕する集団。子供のために命を厭わず、自分の財産がそっくりなくなっても構わない、それが家族では当たり前といわれている。ところが、普通の組織というのはそういうわけにはいかないんですね。共同体というのは、あることをしたら、それ相当のお返しが期待できなければ、存続しえませんが、そのルールと家族の論理は一致しないわけで、それを同時に行うところに、人間の不思議さがある。動物は、繁殖を中心に群れを作るか、シマウマのように、繁殖は二の次で集団を中心に作るかどちらかひとつで、この二つを組み合わせることは普通できていません。人間は、これを組み合わせたところに面白さがあるわけです。

それで、人間は、その由来をどういふふうと言われてきたかという、人間は進化の英雄である、なんです。どういふことかという、つまり、この自然界を知能と道具によって征服してきた。道具というのは「技術」であり、知能というのは「大きな頭」です。それによって、人間に都合のいい環境をつくりあげてきた。で、そのそもそもの生業様式はハンティング＝狩猟であると考えられたんです。つまり、人間は二足で立って歩いて、両手が自由になった。その手で道具を作り、その道具を使って狩猟を始めた。その狩猟には協力が必要であり、協力により効率良く獲物を得る手段を考えることで、さらに人間は知能を発達させ、協力できる集団をつくりあげた。狩猟は男の仕事、育児は女に任せるといふ、家庭内、家庭外分業というものを始めて、家族というものをだんだんと精錬化させていき、そして武器を高度に発達させることによって、狩猟から人間同士の戦いに向けて戦争という行動を作り上げたというシナリオが、一般的だと言われてきたわけです。

例えば、みなさんご覧になったと思いますが、1960年代（1968年）に製作されたスタンリー・キューブリック監督の映画「2001年宇宙の旅」も、このシナリオが描いてあります。猿人が、ある宇宙から

の物体に靈感を得て、キリンの大腿骨を道具にして狩りをすることをおぼえ、その同じ武器をです、水場をめぐる争い合う集団間の戦争に応用したことによって、ある集団が別の集団を支配するという「支配・被支配」の社会をつくりあげたというシナリオです。これは、ある時までは人類の進化の事実として信じられてきた。おそらく、ほとんどの人が、未だにこれを信じているかもしれませんが、しかし、そうではないということが、最近わかってきました。人類の歴史の中で、武器＝道具を使って狩猟を始めた

人類は狩猟者として進化した

- 直立二足歩行による手の解放
- 道具による狩猟の発達
- 協力的行動の増加
- 狩猟と育児の分業
- 狩猟から戦いへ



家族の原型

「2001年宇宙の旅」

たというのは、ずーっと最近になってからの話であって、はじめは直立二足歩行し、頭は類人猿並みの小さな脳という人間から始まって、それが長いこと続き 500 万年も経ってから、やっと石器が作られ始

めます。そして、その石器というのも、狩猟のためではなく、肉食獣が獲ってきた獲物を掠め取った後、その獲物の肉をこそげ取るためのものでした。

そして、最近のトピックスですが、南アフリカで、棒の先に槍の穂先がついた50万年前の化石が見つかりました。最古の槍です。だから、槍を使って動物を狩ることですら、やっと50万年前になって起こったことなんです。では、それまではどうしていたかという、恐らく、長い間、道具を使わず、小動物を捕らえて食べていたんだろうと思います。つまり、狩猟は人類進化の原動力ではなかった。だから、あの「2001年宇宙の旅」は、嘘なんですね。

そして、霊長類の例えば、サル、類人猿が群れをつくる理由っていったいなんだろうと問われた時に、狩猟＝ハンティングという回答を与える種はいません。つまり、人間以外の霊長類のサル、類人猿は、300種類ぐらいいるわけですが、まず、メスが集まって、それにオスが加わることで群れができたと考えられる。そして、メスが集まるその理由は何かという、実は、「食べ物」と、そして「狩猟する」んじゃないくて、「狩猟されることを防ぐ」ためなんですね。つまり、1頭でいるより2、3頭でいるほうが狙われる確率が少ないし、目がたくさんになるので発見効率が高くなり、警戒能力が増すというわけです。これが基本になって、後は、社会内で起こったさまざまなオスとメスの軋轢というものが群れを作る理由になっていくわけですが、根本はここなんです。「食べ物」と「食べられないため」の協力関係。それが群れをつくる理由であって、獲物を獲るために群れをつくる理由なんてここには存在しないのです。

じゃあ、一体、人間の家族というのはどういう社会から生まれたのか。どういう背景で？ どういう条件で？そして何のために？ という疑問が出てきます。その時考えなければいけないのは、もし家族というものが生物学的な背景を持っているとしたら、そこには、系統的な、人間に近い、生物学的に近い動物の社会というものが参考になるだろうということです。これも大きな誤解なんです、ゴリラやオランウータン、チンパンジーは毛が生えてますから、サルと一緒にだろうとお思いの方が多いと思います。でも、これらはヒトの仲間なんです。今は、ヒト科という中にヒトと一緒に分類されています。遺伝子的にも、ヒトとゴリラ、オランウータン、チンパンジーというのはほとんど2%も違いませんから、非常に近いといっている。

そして、実は、ヒト以外の類人猿や、まあ、ほかの動物もみなそうなんです、1日の最重要課題は何かという、それは「食べる」こと。しかも、食べ方にもいろいろある。簡単に考えても、いつ、どこで、何を、誰と、どうやって食べるのか、が重要なんですね。その中でも、誰と、というのが非常に重大な問題であることが、サルや類人猿の研究からわかってきました。一人で食べるのは簡単です。しかし、さっきいったように、一人では、食べ物を見つける効率が悪いし、探している時、捕食者に狙われやすい。だから、誰かと食べなくちゃいけないわけです。その誰と一緒に食べるのか、その誰を、どうやって選ぶのか、が社会をつくった理由なんですね。これは、サルと、類人猿を入れたヒト科とでは大きく違う。何故違うかという、食べるということに関しての大きな違いがあるためです。写真が出て

群れで暮らす霊長類は互いの優劣を認知している



ていますが、今、2頭のサルが餌を前にして向かい合っています。こっちをむいているサルが弱い方で、尻尾を上げているのが強いサルです。自分より強いサルの前では決して食物に手を出さないというルールが、サルにはあります。それは食物をめぐるトラブルを未然に防ぐというサル社会のルールで、これは群れをつくって暮らすサルではほとんど一致しています。あらかじめ勝ち負けを決め、勝ったほうが食物を独占するというのは、負けた方はえらく不利益を被りそうですが、サルの食べものはほとんど植物です。獲りにくい

動物のえさと違い、ほかを探せばなんとかなるので、ここで遠慮してもいいわけです。一緒に生活しているんだから、簡単なルールを決めて食べ物の中で争いをしないでおこうというサルの知恵なんですね。

ところが、類人猿はそうではない。逆なんです。チンパンジーの仲間にボノボというのがいます。サ

類人猿の食物分配



ボノボ



ゴリラ

トウキビを食べている強いボノボのところ、弱いボノボがわざわざやってきて、サトウキビをねだるんですね。手を出して「頂戴」と。ゴリラも同様で、子供が、美味しい木の皮を持っている大人のところにやってきて、頂戴というわけです。その時、じっと顔を覗き込むんですね。そうすると、食物を持っている大人、強い方が食べ物を手放す、あるいは譲るといったことが起こります。人間は、どっちに属しているかということ、やはり類人猿の方に属しているはずなんです。チンパンジーの場合は、まん中に肉を持っている

大きなオスがいて、その周りを弱い、いや、本当は強いんですが…（笑い）、メスたちが取り囲んで肉をくれとっています。結局、オスは断りきれず肉を分け与え、結果的に、この4頭のチンパンジーたちが、向かい合って同じものを食べるということになります。われわれも始終やっていることです。では、これはいったいどういうことにつながっているのかと考えると、面白いことがわかりました。

1992年に、「ミラーニューロン」というものが、イタリアの研究チームによって発見されたのです。鏡のように映し出す神経細胞という意味です。アカゲザルというサルで調べられたのですが、ある行為をしているサルを見ているサルの、その脳の中を見ると、行為をしているサルの脳の中で発火しているのと同じところが発火している。つまり、見ているサルは、行為をしているサルが鏡に映るように、同じことをやっている気分になっているということで、だからミラーなんです。イヌ、サル、ヒトで音声を使って同じミラーニューロンの実験をしたのですが、イヌはほかのイヌが吠えているのを聞いても、脳の中で同じ部分が発火しない。サルは少し、ヒトはほぼ同じ部分がすごく広く発火する。これを「共感」と呼び、イヌにはほとんどなく、ヒトは共感能力が非常に高く、サルもちょっぴりそれがあるということになるんですね。この共感、どういうことかということ、他者が、自分とは違う同じ種の動物がやっていること、その感情がわかるということなんです。ただ、これは道徳ということには直接結びつきません。

逆に人間の場合、相手の心がわかれば、出し抜いてやろうとか、相手をいじめてやろうとか困らせてやろうとかという気持ちが生まれることがあるかもしれない。が、人間は基本的に困っていれば困っている人の気持ちになって、助けようとするはずなんです。これは人間社会の道徳です。同情という感情です。共感と同情は、そもそも違うんだけど、同情は共感が基になっていないと発達しない。人間というのは、恐らくニホンザルとは違って、ゴリラ同様、共感という能力から出発して、その上に同情という感情をつくり上げた、と思うんですね。

実は、共感を育むコミュニケーションというのはたくさんあります。その中で、類人猿と人間で非常に共通しているところがある。それは、「対面交渉」です。人間と同じようにゴリラもよく対面しますが、ただ、その対面のしかたというのは、人間とは違います。ちょっと、このVTRを見てください。ゴリラが知り合いのゴリラツアーのガイドのところへ挨拶に来ます。どういうことをしたらゴリラは挨拶をした気になるか、そのへんを見てください。向き合いましたね。そしてじっと顔と顔を合わせない

共感と同情



ニホンザル



ゴリラ

ゴリラに独特な対面交渉



あいさつ

離れるんですね。机というものを介します。なんで机を挟むかという、食事したり会話するためではありません。本来、これは、長時間、顔を合わせるためなんです。会話は、非常に新しい技術、能力です。その前に対面をするというコミュニケーションが人間にはあった。話をするという時、ちょっと距離をおく必要がある。というのも、類人猿と目が違う。人間には白目ががあり、類人猿にはありません。サルにもありません。人間は、白目の動きを通して、相手の心の動きがつかめる。心の動きをモニターし、そこから重要な情報を得ようとするんです。そのために、対面をするのですが、これは近づき過ぎてもダメなんです。相手と程よい距離で目を見、表情を見て判断するわけです。

われわれは、対面をし、言葉を使って情報交換をしているような気になっているかもしれないが、重要な情報は、実は言葉ではなく、対面した相手の目を通して得られるはず。これが、就職とかお見合い、商談など、大事な時には面接をするということにつながっているのです、相手の言っていることだけでなく、態度、顔、表情や目の動きから相手の性格をつかみ、評価をする。この評価には、対面が絶対必要なんです。言葉だけでは評価できない。われわれは、おそらくこういう古いコミュニケーションを未だに使って、人を選んでるんだらうと思います。

では、そういうコミュニケーションの形式というものは、どうして作り上げられたか。次の図を見てください。霊長類の系統樹です。いろんな種類のサルがいて、近いものから順々につないであるのですが、一番下にヒトとチンパンジーとかがいますね。さっきもいきましたように、ここには、食物分配が見られます。そして、この食物分配がもうひとつ見られる全然系統の離れた分類群として、南米に住んでいる小さなタマリン、マーモセットというサルがいます。系統樹の真ん中あたりに出ていますが、この二つに共通することは、実は、他の霊長類と子育ての仕方が違うということなんです。「託児」、「運び」両用型の子育てをする。「託児」は他に預けてしまい、「運び」は子供を背負って歩く。一番上の方のサルは、巣を作り巣の中に入れるから「託児」としてはいますが、普通のサルは、ずっと母親が赤ちゃんを背中

といけないんです。数秒から数十秒顔を合わせないと、ゴリラは挨拶をした気にならない。これ、私は不思議と思って、チンパンジーでもどうかと、観察してみました。が、実は、同じことをやってるんですね。挨拶以外でも、いろんなところで顔を合わせる。

あれっ、これ人間も同じだなと思ったんですが、人間はちょっと違う。あれだけ顔は近づけませんね。あそこまでやると、ちょっと変な感じがします（笑い）。少し

ゴリラの子育て

- 小さく産んで大きく育つ
- 3年間お乳を飲む
- 1年間は赤ん坊を離さない
- 赤ちゃんは泣かない



子育てをするオスたち



多産



遊び

に背負ったりして子供を育て、託児をしません。人間とタマリン、マーモセットだけは、ほかのサルやヒトに赤ちゃんを預けると言う共通性をもっています。

タマリン、マーモセットは、生まれてすぐ赤ん坊をオスに預けますが、こういうサルに共通しているのは、多産という特徴があることです。双子、三つ子が普通なので、とてもメスだけでは育てることができず、複数いるお父さんに預け、オスが代わりに育てる。ここに食物分配が芽生えるというわけです。乳離れするようになると、オスが子供に給餌をします。

子育てのバトンタッチ

お乳以外のものを
食べ始める頃

母親がシルバーバック
に預ける

遊び相手と仲裁者



ところで、霊長類にはもう一つのタイプの託児の仕方があるのです。それは、私がずっと研究しているゴリラに見られます。ゴリラは、生まれてすぐの赤ん坊には興味を示しませんが、離乳をするようになってお母さんがお父さんに子どもを預けて、お父さんが育て始めます。つまり、子育ての「バトンタッチ」が行われるのです。子どもはお母さんから離れ、お父さんにずっとついて歩くようになります。こういう形式もあるんですね。この二つのことが、人間にとって多分非常に重要だろうと思います。

ちょっと、ゴリラのお父さんの子育ての様子を見てください。ここで重要なことは、ゴリラとタマリンの違いというのはですね、タマリンのオスたちは、生まれた直後から赤ん坊を抱きます。お母さんがたくさん子どもを産むため、子育てをお母さんの代わりになって手伝うんです。でも、ゴリラはそうではなく、子どもが乳離れをする頃に子育てをします。お母さんとお父さんが一緒になって子育てはしないんですよ。さっきもいったようにバトンタッチです。これがタマリンと違うところです。

そんなゴリラを見てますと、非常に面白い特徴がある。赤ちゃんは生まれた時の体重は 1.8 kg で非常に小さい。それがオスは大人になると 200 kg を超えますから、本当に小さく産まれて大きく育つんです。しかも、3年間、お乳を吸います。これは長いですよ、人間は1年ぐらいですから。そして、お母さんが1年間、決して子どもを手離しません。寝る時も、動く時も、食べる時も抱いたままです。そんな赤ちゃんは、泣きません。多分、泣くということと、お母さんが子どもを離すということとは強い関係があると思います。さっきもいいましたが、そんなお母さんは、子どもが乳離れするようになると、それを促進するようにお父さんのところに行って子どもを預けるんです。そして、お父さんは、子育てをお母さんのようにするのではなく、子ども同士がうまく遊べるように、その「仲裁者」、遊び相手になるんですね。

このことで、私がゴリラからひとつヒントを得たことは、ゴリラでも、父親ってのはつくられるんだなということです。つまり、母親からまず、自分の子どもを預ける信頼できるパートナーとして選ばれ、

子ども自身から自分の保護者として選ばれることで初めて父親としての役割を発揮できるわけです。自分で、私は父親ですと宣言して子供に近づいても、母親、子供が信用してくれなかったら父親になれない。これは人間でも同じなんじゃないでしょうか。

父親はつくられる？

- 母親から
- 子供自身から
- その結果、インセストは回避される



ウェスターマーク効果

親子愛と恋愛は両立できない

親子は生涯信頼のきずなで結ばれている

いころに親しく付き合った異性には、大人になった時、性的関心をおぼえないというものです。これ、提唱された後、ずっと1970年代まで黙殺されていたんです。それが、どうやらサルにも同じような現象がある、と60年代から霊長類学者が言い始め、さらに、人間社会の中でも、イスラエルのキブツで一緒に育った子同士は、性的関心をおぼえないということがわかってきて、これでウェスターマーク効果が復活しました。これは、いうならば家族というものの原型をつくるのにとても必要な感情領域だと思います。というのは、家族というのは、あるひとつの組合せの異性にしか性的交渉は認められていません。他の組合せには禁止されているのです。ウェスターマークは、これについて、家族がまとまって一緒に子育てすることで、それは自然にできると予測したのですが、ウェスターマークを黙殺したフロイト一派は、親の制止、禁止が入らないとそれは成立しない、つまりエディプスコンプレックスといわれ

るものです。明らかに基づくものは違うわけで、後で渡辺さんがおっしゃるかもしれませんが、今は、どうやら、ウェスターマークの方が正しいらしい、というのが一般的な見解のようです。

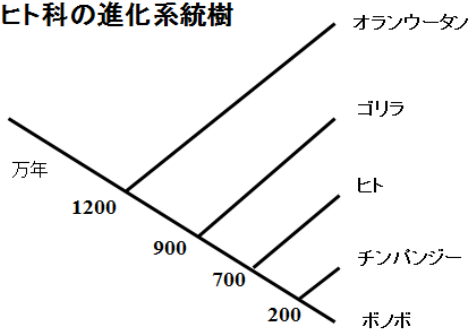
これを私が重要視するのはですね、家族というのは、禁止されるものと独占されるものがある初めて、平和に共存できるわけです。例えば、息子が母親を異性の相手として、父親と争ったら、家族は存続できないですね。しかし、これはサルでは起こるんです。母親と息子を引き離して育ててしまうと、そういうことが起こります。そして、もう一つ重要なことは、それは、育ての親であって、生みの親ではないということです。アカゲザルで、ほかのメスに子どもを育てさせた実験の例がありますが、子どもは、生みの親には性的関心をいだき、育ての親にはいだかないということが結果として起こりました。これは人間でもそうなんです。霊長類は、共通してそういう素地を持っています。だから、子供にとって、育ての親が親であって、生みの親は親ではない。感情面からいうとそういう話になります。そのため、親子というのは、ある幼年期の密接なつながりというものがずーっと生涯、効果として生き続けるんだということが原則なんです。これが人間社会をつくる基軸であり、家族というものを成立させる土台になっていると考えられます。

では、こういうものを原資にしてですね、どうやって、人間は、動物ではできなかった「家族」と「共同体」というものの両立をなし得たのか、ということです。それは、おそらく、長い子ども期を通じた共同の子育てと、食を共にした（「共食」による）分かち合いの精神から生まれたんだろう。つまり、子どもを家族の中に限定して育てなかった。あるいは、食を通じて家族間のつながりを作った。そんな人間の子どもはゴリラから見ると、不思議な特徴がいっぱいあります。生まれた赤ちゃんはゴリラの2

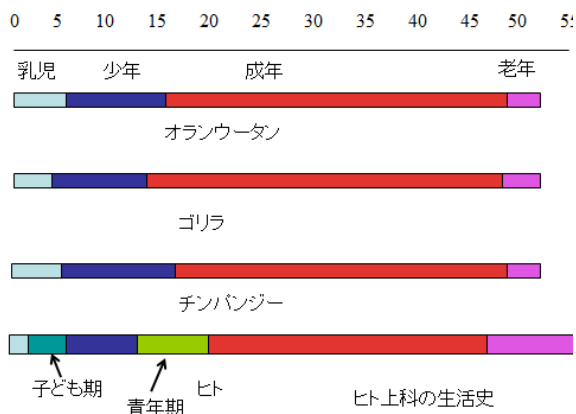
倍ほども大きい。よく泣くし、また、よく笑う。お母さんにつかまれないし、お乳は1年ぐらいで勝手に乳離れしますが、成長は遅い。

じゃあ、その不思議な人間の生物学的な背景を探るためには、ヒトに近い類人猿を見てみようというわけで、資料に、1千万年以内に分かれた類人猿の進化系統樹と生活史の比較も載せています。生活史というのは、表の一番上に50年ちょっとの年齢がとってあり、生まれてから死ぬまで、その間にどのようなスケジュールで成長や繁殖を経験するかを比較し、示

ヒト科の進化系統樹



したものです。最近、人間以外の類人猿の長期調査によるデータが得られるようになって、この比較が可能になったのですが、すごく面白いことがわかってきました。さっきいったように、人間は、お乳を吸っている時期が短い。ただし、ほかの類人猿は、長く吸っていても吸い終わると、すぐに大人と同じものが食べられます。そういう歯、永久歯を持つようになるわけなんです。ところが、人間の子供は、「六歳臼歯」といわれるように、6歳にならないと永久歯が生えてこないから、大人と同じものが食べ



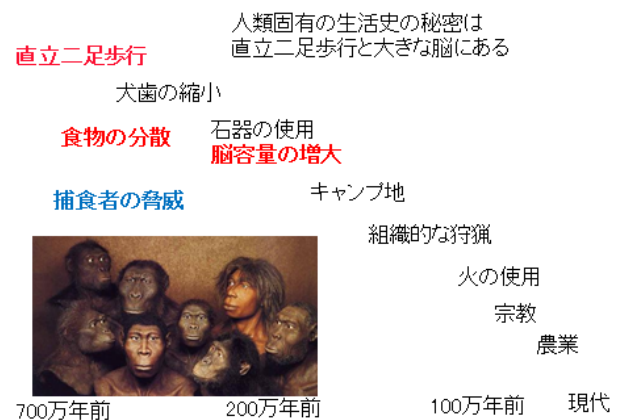
られない。これを、表に書いてあるように「子ども期」というんですが、そういう時期が3、4年あるわけですね。これは、ほかの類人猿にはありません。この時期は、人間の子供は、食の自立ができないから、上の世代が助けてやらないといけないんです。それから、類人猿は、青年期になると繁殖に参加しますが、人間の場合は、繁殖能力が付いても繁殖をしない時期、できない時期が挟まれています。これは、ほかの類人猿にはあまりない不思議です。それと、もう一つ老年期が長い。この三つの特徴が人間にはある。これは、それぞれ独立して人類の

進化史の中に現れたのではなく、組み合わせられて現れたんじゃないかというのが、私の意見です。 つ

まり、それは、類人猿と同じように熱帯雨林に住んでいた人類の祖先が、安全な熱帯雨林を出て、危険な草原へと出た時に起こったことだと思います。

それで、これまで20種類以上の人類が世界に登場しているのですが、全てアフリカで生まれています。アフリカからアジア、ヨーロッパへと進出していきました。われわれ現代人は20万年前、アフリカで誕生し、アジア、ヨーロッパへと広がったんです。人類は、古く700万年前にアフリカで誕生し、熱帯雨林からだんだん草原へと出て行くのですが、そこは、食料が分散しているし、逃げ込む木もないから、常に肉食獣に狙われ、幼児死亡率が急激に上昇したんですね。この時、多産という能力が身に付いたはずですが、ある一定期間に何度も子どもを産むということで、多産になっていった。それは、授乳期間を短くすれば可能になるんです。お乳をやらなければ、次の妊娠が可能となり、そうすることで、出産間隔を縮めた。人間は、こうして、一生の間にたくさん子どもを産むようになったわけです。これが、人間が世界中にこれだけ満ちていった、最も大きな理由だと思われます。人間は草原に出て、分散した食物と強力な捕食者への対応という、それぞれ解答が違う二つの課題に対処しなくちゃいけなくなった。つまり人間は、ほかの動物ではできない家族と共同体を作るという難しい命題を、この時、課題として与えられたということなんだと思うんです。

そもそも、草原に出て、二足で立って歩くことは、広い範囲を餌を探してゆっくり行くのに非常に重宝な歩行様式だった。そして、もう一つ、それで、やはり手が自由になった。でも、その手で、複雑な道具を作ったわけじゃない。化石に全く残っていませんからね。では何をしたかという、ものを運ぶこと。特に、高価な、高栄養な食物を、自分では探せない人たちに運んだのではないか。この二つが、人類が二足歩行になった理由ではないかと最近考えられています。



それで、なぜ人類は、重い赤ちゃんを産むかということなんですが、人間の赤ちゃんは体脂肪率が15~25%ぐらいで、類人猿の5倍もあります。実はそれは、大きな脳のためなんです。人間の子どもの使命は、成長期に脳を大きくすることです。だから、生まれて最初から栄養が滞ると、脳の成長が危機にさらされるので、脂肪を蓄えて、それが滞らないようバッファを作っていると考えられます。人間の脳は3段階で発達します。1年で2倍となり、5年で大人の脳の90%となり、12~16歳で大人の脳になるんですね。ゴリラは、4歳で2倍になり、それで終わり。500ccです。人間の脳は、生まれた時はあまりゴリラと変わらないのに、3段階の発達で、大人になるとゴリラの8倍にもなります。以上のように、人間の子どもがなかなか身体的に発達しないのは、脳の発達を優先するからなのです。ところが、「思春期スパート」といって、人間は、脳の発達が完成する12歳から16歳ぐらいでエネルギーを身体に回せるようになり、一気に成長速度が加速します。女の子は爆発的な繁殖力を獲得し、また、同時に、学習によって社会的能力を身に付けるんです。

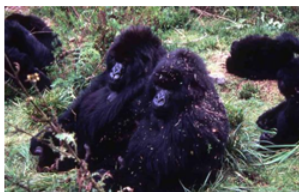
このように、ゆっくりとした身体の成長をするところに人間の子どもの特徴があるんですが、これを完成させるためには、「共同保育」が必要になってくる。多産ですから、お母さんだけでは育てられないのです。人間の赤ちゃんはその歴史を反映しています。赤ちゃんがなぜあんなに泣くかという、お母さんがすぐ託児してしまうからです。いろんな人の手にわたって育てられるようになっているから、泣いて自己主張し、あるいは、にっこり笑って誰からも愛される存在になる必要があるんですね。

これに関連して、「おばあちゃん仮説」というのがあります。人間には閉経があるんですが、まだ健康なのに、わざわざ子どもを産まなくなって、そしてそれから、長い期間生きる。その間、何をしているかという、次の世代の出産を助けたり、孫の生存価を高めたりするように振舞う。これによって、人間の寿命が伸びたという仮説なんです。このことをサポートする説があるんですね。一つは、現代の

狩猟採集民を調べたもので、食料を与えられたらマイナス、与えるとプラスというネット生産量を年齢ごとに比較しています。チンパンジーは、多少分配はしますが、ほとんど、プラスマイナスの振幅がありません。ところが、狩猟採集民は、20歳まではたくさんもらって育つ。しかし、自分で食物を得ようになると、その後の長い人生を使い、たくさん人に与えるようになり、お返しをする。サルに比べると、プラマイとても大きな振幅を見せているんです。もう一つは、認知能力のテストなんですが、人間の子供は20歳にかけて急速に能力が高まる。その後、徐々に落ちていきますが、60歳を過ぎても体力

おばあちゃん仮説

- 危険を伴う出産
- 閉経時期の前倒し
- 子どもの世代の出産を補助し
- 孫の世代の生存価を高める



に比べると、認知能力そんなに下がらない。これが人間の社会の特徴であって、高齢に至るまで高い認知能力を使って人類の社会は築き上げられている。つまり、「おばあちゃん仮説」など、老年期の世代というのは人間の社会にとって大きな貢献をしてきているということなんですね。

もう一つ、育児というのは、人間の音楽能力を向上させたのではないかという説があります。乳幼児はまだ言葉を理解しません。泣き喚く乳幼児を黙らせるためには子守唄が必要です。子守唄のトーンやピッチは、どの民族にも共通の特徴を持っていると言われていて、子供は絶対音階をもって生まれ

てきますので、話しかけられる言葉の意味ではなくて、そのピッチやトーンに反応して泣き止む。だから、人間は、生まれながらにして子どもを泣き止ませるような話し方ができる。それは、実は音楽の能力なんだということなんです。そこから出発して、人間は、音楽を、大人同士のコミュニケーションに使い始めました。なぜかというと、共感力を高めるために非常に有利だったんですね。音楽は一緒に歌ったり、一緒に聞くことで、お互いの間にある境界を低くし、一体化するような感情を高め、そして、満足感や高揚感を得ることができるわけです。これは社会の同一性につながり、これが、おそらく神という存在を作り出したのではないかと思います。

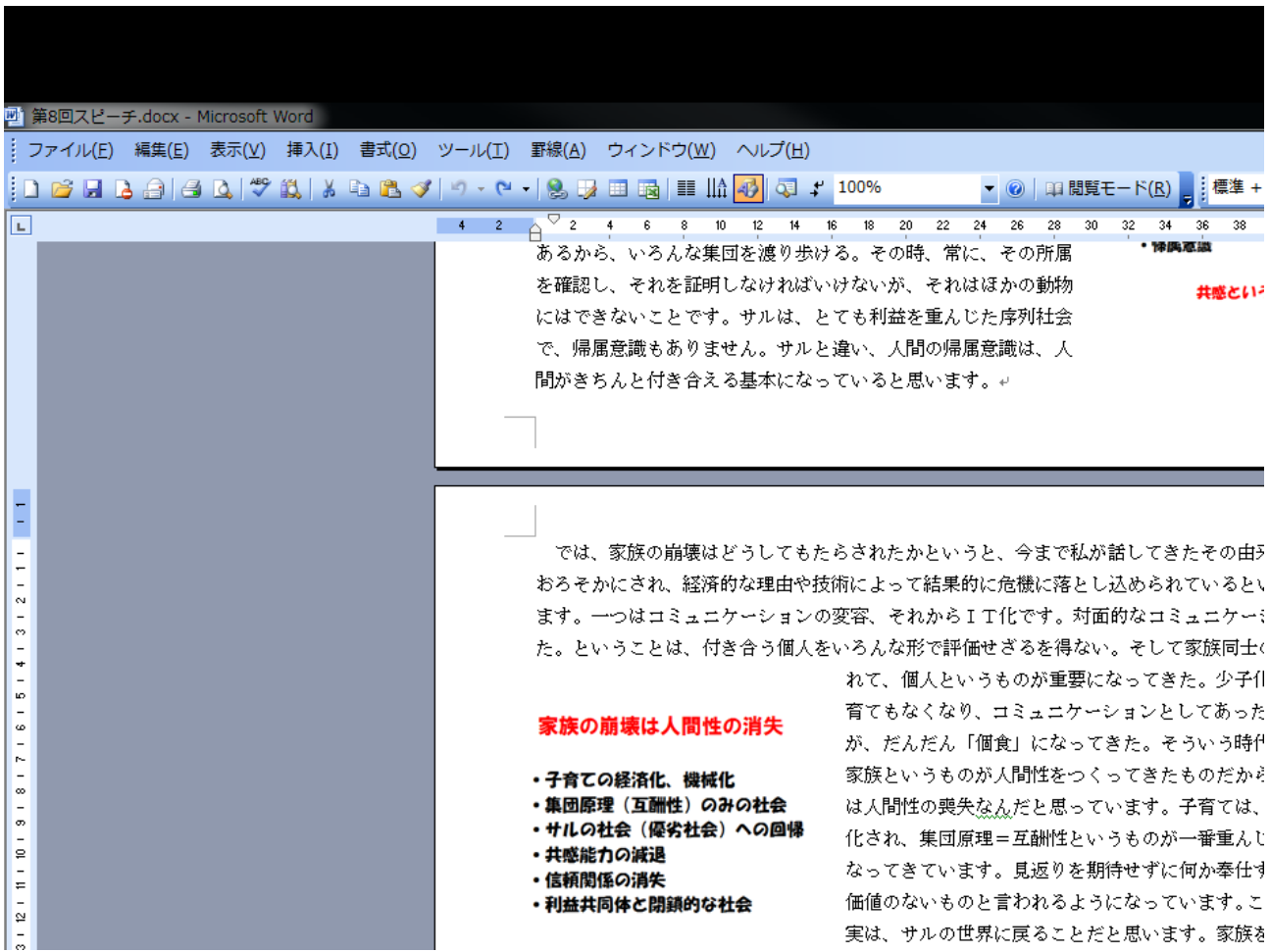
こういった共感能力が発達することで、人間の子供は類人猿の子供とは全く違う能力、「憧れ」を持つようになります。つまり、将来なりたいと思う存在ができる、あるいは、素晴らしいと思える存在ができる。ゴリラの子供は、当たり前のように大人になっていきますが、何かになりたいとは思わないでしょう。人間の子供は目標をつくります。そして、他者に自分を見、想像します。このことは、育児というものが、長く続くということに結びついている。子供がそんな憧れとか目標を持つものだから、そういう子供を知っている他者が、育児に関わり、子供をはさとし、導いてやる必要が出てくる。つまり教育です。人間は、とてもおせっかいなんですね。望まれてもいないのに助けに行く。そういう経験がおありだと思んですが、そういうことを常にしている。共感というものを超えて、共感力を過熱させて作り出した同情です。これがなければ、われわれが当たり前と思っている人間の社会は作れない。

人間の持っている普遍的な社会性というのは、次の三つだと思っています。一つは、見返りのない奉仕をする。これは、家族では当たり前だが、そこにとどまらない。次は、互酬性、なにかしたらお返しが来る。してもらったらお返しをする。そして、三つめは帰属意識です。自分がどこに所属しているか、これは一生持ち続けます。逆説的ですが、帰属意識があるから、いろんな集団を渡り歩ける。その時、常に、その所属を確認し、それを証明しなければいけないが、それはほかの動物にはできないことです。サルは、とても利益を重んじた序列社会

人間のもつ普遍的な社会性

- 向社会性(見返りのない奉仕)
- 互酬性(対等な助け合い)
- 帰属意識

共感という感性に基づく



で、帰属意識もありません。サルと違い、人間の帰属意識は、人間がきちんと付き合える基本になっていると思います。

では、家族の崩壊はどうしてもたらされたかという、今まで私が話してきたその由来というものがおそろかにされ、経済的な理由や技術によって結果的に危機に落とし込まれているというように思います。一つはコミュニケーションの変容、それからIT化です。対面的なコミュニケーションが失われた。ということは、付き合う個人をいろんな形で評価せざるを得ない。そして家族同士のつながりが薄

家族の崩壊は人間性の消失

- 子育ての経済化、機械化
- 集団原理（互酬性）のみの社会
- サルの社会（優劣社会）への回帰
- 共感能力の減退
- 信頼関係の消失
- 利益共同体と閉鎖的な社会

れて、個人というものが重要になってきた。少子化で、共同の子育てもなくなり、コミュニケーションとしてあったはずの「共食」が、だんだん「個食」になってきた。そういう時代がきました。家族というものが人間性をつくってきたものだから、家族の崩壊は人間性の喪失なんだと思っています。子育ては、経済化、機械化され、集団原理＝互酬性というものが一番重んじられるようになってきています。見返りを期待せずに何か奉仕するのは無駄、価値のないものと言われるようになってきています。これらのことは、実は、サルの世界に戻る事だと思っています。家族をなくして集団原理だけでやっていくことは、サルの優劣を重視した社会に移行することだと、今、私は思っているのです。

テーマ「家族の由来に関する誤解～ゴリラから学んだこと～」

☆ディスカッション

▽ディスカッサント

- 堀場 雅夫（堀場製作所最高顧問）
高田 公理（佛教大学社会学部教授）
渡辺 実（花園大学社会福祉学部教授）
山口 栄一（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）

高田 公理（佛教大学社会学部教授）



山極さんと私は、知り合って、かれこれ40年ぐらいになります。27、8歳ごろ、私は酒場を経営していたのですが、山極さんは、その店の常連さんだったんですね。

酒場というのは、カウンターの中から客席を眺めていると、どこか動物園のサル山みたいに見えます。おごったり、おごられたり、新しい付き合いが始まったり、喧嘩が起こったり……。それは、ちょうど山極さんがアフリカへ調査に出かけるようになった時期と重なっていたのではないかと思います。もっとも、そのころは、山極さんのことを、「アフリカへ、ゴリラに調査されに行ってるんとちゃうか」などと言っていたような気がします。

それが本日のスピーチを、あらためてきちんと聞かせてもらおうと、じつに包括的に「ゴリラから学んだこと」を話されて、まあ、40年の時間の経過を、感慨深く振り返っていたような次第です。

で、お話を聞いていて考えたことはいろいろあるのですが、なかに家族は「禁止」と「独占」の上に成り立っているといったことがあったように思います。それを少しづらせながら思い出したのは、人類社会に普遍的な二つのタブーについてです。すなわち「インセスト（近親相姦）」と「カニバリズム（喫人）」ですね。これらが許されると、人はアイデンティティ崩壊を起こし、家族をはじめ、共同体が解体してしまうわけです。もっとも、こればいわば「タテマエ」であって、実際にはしばしば、タブーは破られるのですが、そんな話を女子大生相手の講義のなかで話したところ、とんでもない不思議な反応が返ってきました。いわく、

「父と母は、セックスしてもインセストにならないんですか」

いやあ、ある意味で見事に虚を突かれたような感じがして、驚かされたのですが、そんなことを今日のお話を耳にしながら思い出しておりました。

そういえば最近、「妻だけED」などという言い方があって、余りに慣れ親しんでしまった男女の間では、イスラエルの同じキブツで育った男女の間における「ウエスターマーク効果」のようなものが作用して、セックスをするのがむつかしくなるのかなあ、といったことを考えさせられたりもしました。

今ひとつは、家族成員の間の「共感」に関するものです。動物としての人間の特質の一つは、食物や食事に関することで、「料理をすること」と「食物を互いに分配して共食（きょうしょく）すること」だと言われます。ところが、最近の日本の家庭生活をイメージしてみると、余り料理はしない、家族成員が集まって共食する機会が減っている、といったことが言えそうです。いわば「食をめぐる人間らしさ」が減退しているわけです。なかでも極端なのは、若い学生たちの「便所飯」——便所に隠れて、独りで食事をする学生がいるというんですね。

こうしたことを考えると、今日、ヒトはヒトとしての特質を失いつつあるのか。あるいは家族という集団を媒介としない新しい生き方が誕生しつつあるのか。このあたりのことも考えてみる必要がありそうです。

そして最後に、人類の言語について、こんなことを考えさせられました。つまり、現代世界には約5千種類の言語があるといわれます。それらの言語は、普通「コミュニケーションの道具」だと言われるのですが、たしかに同一言語を使う人々の間では、その通りです。でも、これだけ異なった言語に分化していることを考えると、それは同時に、異なった言語を使う人々には理解できない「ディスコミュニケーションの道具」でもあるわけでしょう？ もっと極端なことをいえば、理解できない他言語は、けっして共感を呼び起こすことのない「隠語の体系」だとも言える。言語は、そういう両義性をはらんでいると考えるべきなんですね。

それに対して、音楽や「互いに見つめる」という行為などは、見知らぬ人との間にも共感を呼び起こす可能性をはらんでいる。

このように言語を、必ずしもコミュニケーションの道具ではないのかもしれないと考えてみると、そこからいろんな展望が開けるかもしれない。まあ、そんなことも、山極さんの話からインスパイアされたような気がします。

といったことを少し考えてみたのですが、堀場さんは、どんなことを考えられましたか。

堀場 雅夫（堀場製作所最高顧問）



大体、小さい子どもはどっちかいうと嫌いで、3歳ぐらいになってきて、こっちに対する反応が出てきたらやっとな面白くなってくると思っているんです。

それで、ゴリラのオスは、喜んで子供を育てているの？ それともしゃあないと…、どういう感情をもって育てているんでしょう。そして、オスに育てさせている間、メスは何をしているのかなあ。

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）



ゴリラも堀場さんと一緒に、生まれたばかりの赤ちゃんには関心を持ちません。さっきもいいましたように、父離れするとメスがオスのところに運んで来て対面させるんです。すると、その時、子どもが父親にちょっかいをかけ出し、背中とかであそび始める。お父さんは、

子どもたちが群らがってきたり、背中を滑り台にして遊んでくれるのが、どうも心地いいようですねえ。決して、子育てに積極的というわけではないんですが…。

高田

その点では、ゴリラと堀場さんとは同じだといっていいわけですね。

堀場

ゴリラも私レベルになっているのかな。(笑い)

山極

実は、昔、日本人の男もね、父親はすぐに赤ん坊を抱かないというのが多かったようですね。例えば夏目漱石は絶対子どもを抱かなかったといますよね。子育てをするのは女性たちで、確かに、父親、父親と周囲からもいわれるんだけど、なかなかその役割は果たせず、元服するようになって、ようやく子どもと向かい合うようになる。これは、多分、日本の文化では、家族ではなく「家」というものが重要だったからではないかと思います。

山口 栄一（同志社大学大学院総合政策科学研究科教授）



父親の問題はおもしろいですね。日本の父親というのは、確かに昔は「恐るべき存在」で、近寄りがたくて、という感じだったと思います。それが、家族の確固さを守ってきたわけですが、高度経済成長期に入って、その父親が日本社会からいなくなりました。企業が、父親を連れ去ってしまい、家庭にはいない。子どもが物心ついたころには、父親はもう家庭にはいないわけです。いるのは日曜日だけなんだろうけど、それもゴルフとかに出かけるので、不在になる。これが、今日の日本社会を色濃く性格づけたと私は思います。

私は、ヨーロッパで長く暮らしていました。その時感じたことは、欧州の子どもはすごく独立精神が強いということです。13、14歳でもう結構強い独立精神を持っている。このことが、日本より盛んな「起業家精神」と強くつながっている。これって、実は、父親が確固として家庭にいるから、子どもは少々飛び跳ねてもいいんだ、というところから出てきているのではないのかなと、勝手な推測をしています。日本人の父親の希薄さって一体何だろう。父親が希薄だから、却って独立精神が養われないのではないかな。渡辺さんにおうかがいできますか。

渡辺 実（花園大学社会福祉学部教授）



そうですね、産業革命もあって、明治以降、突然、子供の数も増え、学校ができ、教育も父親のあり方も随分変わってきたのですが、特に、戦後、高度経済成長の中で、家族の中での父親の存在がどうなっていったのか、もう一回考えなきゃいけないですね。私は、京都市で小学校、

保育園の巡回相談をしています。今、何が一番問題になっているかというと、お父さん、お母さんたちが、子どもと遊べないということなのです。子供たちはビデオゲームをして、お父さん、お母さんは仕事に疲れて、という状態で、親子でキャンプに行くとかもほとんどありませんし、トランプをするなんていうことすらもなくなっている。遊びが大事だと思うのですが、家族の中での父親の存在っていうのは、子どもに遊びを伝え、その中で、子ども同士がルールや言葉を覚えていったりしたわけで、実に父親の役割は大きかった。先ほどの山極先生のゴリラのオスと同じで、人間でも見守る大人というのが重要なのですが、子どもに遊びを教え、遊ばせながら見守る、そういうお父さんや近所の大人が、地域社会の変容もあって、最近だんだんいなくなっている。

それから、小学校になると、「ギャング・エイジ」といって、子供たちは、結束の強い友達グループを作って、大人から自立を図ろうとするのですが、ゴリラにも、群れて大人になろうとする子どもたちを見守るお父さんがいるというお話だったのですが、人間にも共通していると思います。そういう存在がなくなっていることが、「いじめ」とかの問題につながっているように思うのですが、山極先生どうでしょう。

山極

いろんな時代区分はあると思いますが、どの世界や文化でも、子どもはある特定の男に結び付けられるんですね。父親がどういう行動をしようとしないとにかかわらず、その子どもは、どの男の庇護と責任のもとに置かれるという共同体の合意ができるんです。それが、人間の父親というもので、ただ、父親がどう子どもに接するか、相当、文化や社会の環境によって違いがある。渡辺さんもおっしゃったように、江戸時代から現代に至るまで大きな変化を受けていると思います。教育では、学校ができてから、子どもの育て方に誰が責任を持つかなんて、随分変わってきましたよね。

ところで、人間の男が、生物学的に持っている声変わりという特徴があるんですね。動物行動学でいえば、男にしかない声成りは、太い声は男の特質として、女から選ばれることで進化したと解釈されているんですが、私は、子育ての能力かもしれないと思うんですね。つまり、人間の男は、女とは違う子育てをする必要が生じたので、太い声を出せるようになった、ということです。例えば、敵を震え上がらせ、子供たちを逆に安心させる。あるいは、子どもたちの間のトラブルを太い声でしずめる。昔の雷親父ですね。これは、父親でなくてもよかったです。声成りをするようになった大人が子どもに対して、どういう関係を持っていたかっていうことを、生物学的に如実に反映させてくれる特質だろうと私は、思っているんです。



高田

なるほど……そこで思い出すのは 1955 年ごろ、日本では半分以上の大人の男が俸給生活

者になって、つまりは家から外に出て稼ぐようになったという事実です。それまでは、農家も商家も職住近接で、父親と子どもは一緒に生活していたのですが、高度成長期に父親たちが俸給生活者になるにつれて、そうした関係が壊れてしまった。結果、子供たちが、大人の男の太い声を聞く機会が減少したというわけですね。

山極

例えば、学校教育でもそうで、今、学校に行けば、クラスがあって同世代の子どもたちが集められて、優しい女の先生が、お母さんのように接してくれる。で、叱ってくれる怖い声の先生はそれほどいるわけじゃないし、例えいたとしても、子どもは集団でいますからあまり怖がらない。ルールやマナー、エチケットを身近におぼえさせてくれる存在が非常に少なくなったということは確かですね。

渡辺

先ほど堀場さんが、赤ちゃんはわからないから、とおっしゃっておられましたが、実際、心理学者も、赤ちゃんのことをやり始めたのは、ここ2、30年のことなのです。それまでは「暗黒の2歳」といわれていて、言葉をしゃべるようにならないと、子どもの能力がわからない。まあ、男の研究者がだらしなかったのですが、知能検査も言葉なのですね、だから3歳ぐらいからしかわからなかった。最近、女性の心理学者がたくさん出てきたとい



うこともあって、だんだん、赤ちゃんのコンピテンス、いろんな能力がわかってきたんです。それで、先ほど太い声ということで思い出したのですが、赤ちゃんに語りかける時、女性の場合は声が高くなりますが、その一方、子どもたちは、男性の太い声も好むんですね。山極さんが、ゴリラの声を出しながら、ゴリラに近づいて行かれるところを見たことがあります。あの「うーん」という声で、ゴリラは安心して警戒心をといていましたね。ヒトの赤ちゃんも、男の低い声で安心するところがあって、共通したものがあると思います。

山極

ああ、それは面白いですね。

高田

ところで、ゴリラは声変わりしないですか。

山極

いや、するんですよ。ただね、人間の男は声帯が大きくなりますね。ゴリラは、声帯ではなく、「共鳴袋」というものが発達して、その袋で声を増幅させるんです。その違いはありますが、声変わりすることには変わりはない。メスは、この袋が発達しません。

高田

ということは、大人のオスとメスで、声は違うわけですね。

山極

違います。全然、違います。



山口

乳離れのことをちょっとおうかがいしたいと思います。私事で恐縮なんですけど、私、初孫が生まれまして、それで、新生児と接することが極端に多くなるとともに、それを保育する環境にも入り込んで、ほんとに驚いたことがあるんです。それはですね、最近では、乳離れを強引にさせない。それで何が起こるかという、(幼稚園の)年中ぐらいまで乳離れしない子がいはじめる。それでも、あえて乳離れを強制しないので、だから、年中の子で、言葉もじゃんじゃんしゃべり、普通のものも食べているのに、お母さんのお乳を飲みに行くらしい。お母さんもお乳が出るようなんですが、これを推奨していると聞いた。これって、人間の「ゴリラ帰り」じゃないでしょうか。

山極

人間の場合は、お乳をやっつけても妊娠することがあります。でも、基本的には子供ができる率は下がりますので、実は、江戸、明治時代、子どもをあまりつくりたくないの、お乳をずっと飲み続けたということがあったし、今も、そういう文化はあります。実は、類人猿の中で一番乳離れが悪いのは、オランウータンなんです。次に、チンパンジー、ゴリラの順で、ゴリラは割と乳離れが早いんですね。それは、お父さんがいて、託児ができるからなんです。ところが、オランウータンはね、メスもオスも1頭で暮らしている。単独生活で、託児をしない。そのため、ずっと1対1で、お母さんと赤ちゃんがいるっていう環境で、乳離れをせず、7年ぐらいお乳を吸い続けることができる。その間妊娠しませんが、非常に子どもが少なくなりますね。ですから、「ゴリラ化」というより、むしろ「オランウータン化」といえるんじゃないですかね。

堀場

今じゃ、もう見られませんが、昔は、市内の路上でもよく見た光景で、牛馬が荷車なんか引きながら、所構わず糞をするんですね。それで、オランウータンとかゴリラは、どうするんですか。どこか見られないところでしたり、あるいは所構わずするんですか。

山極

それはね、きょうお話しなかった、「おしめ」に関連することなんです。基本的に人間や霊長類はあたり構わずできます。なぜならば、樹上生活だから、地面にいくら落ちて自分にはほとんどかからない。しかも、熱帯雨林ですから新陳代謝が非常に激しく、フンコロガシとかたたくさんの虫がいて、糞は、あっという間に分解されます。だから全然汚くない

い。それと、霊長類は基本的に、フルーツを食べます。これは、フルーツを食べてあたり構わず糞をしてもらうよう、植物側が、仕組んでいる。動けない植物が美味しい果実を提供し、その代わりにいろんなところに糞をもらって種子を運んでもらうというサルと植物の関係なんです。人間もそういうふうにできているはずですが。肉食獣は食いだめがききます。しかし雑食の胃腸を持っている人間は、サル同様、毎日食べなくちゃいけないし、毎日糞をしなければいけない。しかし、定住生活をするようになって、あたり構わずできなくなりました。また、地上で暮らすので、いろんな糞がかかるし寄生虫や汚染の問題なんかも出てきて、特別のところに貯めたり、トイレを作ったりしなければならなくなったというわけです。赤ん坊は、サルの体で生まれてきますので、時間、場所を構わずしますので、人間の体にするため、おしめがいるということなんですね。

堀場

昔でしたら、10カ月くらいで、尿意、便意が出たら、親に伝えるという教育をしたものなのですが、このごろの親は、いつまでたってもそういう教育をしない傾向があるんですかね。実は、こないだ、2年もおしめをしたままという子どもを知って、病気かと思ったがそうではない。平気でそうさせている、という。なんだか、学校も親も教育がすっかり変わってしまったな、と思うんですが、ゴリラは、マナーとかトイレのこととか、教えることがあるんですか。

山極

ゴリラには、教育はありません。今の堀場さんの前半の話に答えると。人間の子どもの成長するには、あまり便利でない方がいい場合がある。日本も、昔は家に土間がありましたが、アフリカやアジアにも、土間があり、そこで、子どもたちはおしめをせず、垂れ流しています。それを家畜が入ってきてきれいに食ってくれる。ただ、二足で歩いている子どもは、立って垂れ流すと気持ち悪いから、年上の子がトイレでしているのを見て真似をし、だんだんとトイレでできるようになる。しかし、今のパッケージのおむつは快適ですから、気持ち悪いという感触が起こらない。おしめが取れるのは、おしめ自身が不便なものだったからだと思いますね。



ゴリラの場合には、基本的にはネガティブな教育しかしません。こういうことをしたらダメ、という時には、ぶったり、押しの手したり、噛み付いたりして教えます。だけど、子どもにとってよくなるように教育しているとは思えない。何かトラブルがあって、どやされるだけであって。こういうことをしたらいいんだよ、と導くような教育はゴリラにはなく、人間だけです。

高田

教育というより、しつけだと思うんですが、ゴリラの親はどんなことしたら怒るんです

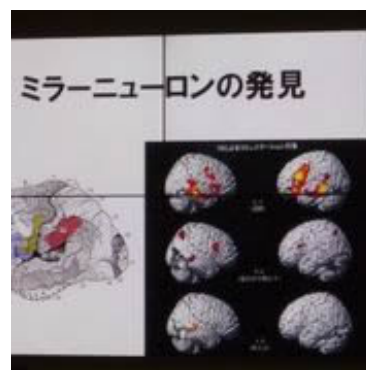
か。

山極

例えば、子ども同士が遊んでいる時に、大きな方の子どもが小さな子どもから餌を取っちゃったり、噛み付いたりして小さな方が悲鳴をあげた時、大きな方をどやします。

高田

大変リーズナブルですね。



山極

ええ、大変公平な仲裁の仕方をします。ゴリラは負けをつくらない。勝者を必ずやっつける、ということをやりますので。それは子どものころからそうですね。きょうは、あまり、深入りしなかったんですが、ゴリラとサルの大きな違いは、サルは勝ち負けを決めて平和を作り、ゴリラは、勝ち負けを作らずに平和を作る。そういうふうルールをつくり方が全然違う。

高田

ヒトも本来、勝ち負けを作らずに平和に過ごそうという方向に進化してきたはずや。そういうことですか。

山極

私は、そう思っているんです。「負けず嫌い」ってことです。「勝ちたがりや」じゃなくて、負けず嫌い。この二つは、違うんです。

高田

とことん競争させて、立ち直れへんようになるまで負け続ける人をつくる。今時の世の中には、そういう風潮があるような気がするのですが、どうなのでしょう。

山極

それはね、元を正せば負けたくないからなんです。でも、負けたくないために、勝者にならないといけない時代になってきた。勝者になっても、その勝ったことをみんなが称えてくれなければ、実はほんとは、楽しくないんですよ。そういう環境があるからこそ、勝ってうれしいっていうことができる。実は、人間社会は、元々、みんなが負けたくないという気分で作りあげられてきたんだけど、その中で、だんだん勝者を称えるような社会を作ってきた。それが、今ちょっと過熱してね、むしろ、勝者にならないといけないような形になりつつあるんじゃないのかなと思います。

高田

しつけのことですが、現代のように、一組の男女の親だけに育てられるというのは、人類史を展望すると非常に特殊なんではないですか。日本でも少し昔は、両親や祖父母、兄弟姉妹などの家族にしつけされると同時に、ご近所の人にもしつけられていた。そういうことがあったので、子供たちは、自分の両親の考え方や暮らし方が特殊なんだということに気づくことができた。ゴリラの場合は、父親の個体ごとの差異や個性はないんですか。



山極

個性は出てくると思うんですが、そんなに違いはないですね。

高田

渡辺さん、しつけについてどうでしょう。

渡辺

しつけということなんですが、人間の社会でも本来、ゴリラのように、勝ち負けをつくらず、平和共存したいというのが、もともとのしつけだったのです。それが、勝ち負けとか、親から、一方的な権威を押し付けられる中で、社会的規範を身につけるようにされるのがしつけというふうに思われてきた。しかし、発達心理学の立場からすると、しつけというのは「問題解決学習」なんです。例えば、2歳ぐらいの時に、大好きなお母さんから、おしっこはトイレでしてねといわれるとか、好きなおもちゃで遊んでいる時、ご飯だから早く食べてねといわれたりする。この時、子どもが、嫌だと、その思いを通すか、親のいうことを聞くか、という、勝つか負けるか、みたいなことになるんですが、本来は、そうではなくて、その時、家族が共存するためにはどうしたらいいか、その場で話し合うということが大事なんです。

子どもと大人がいかに仲良くできるかというのを話し合うのが、本来のしつけの場だったのです。大好きなお母さんから、自分が嫌なことをしなさいとか、嫌なことをいわれるとか、子供にとっては大変な矛盾と葛藤を2、3歳のころに経験するということなんです。これで、人生というのは大変なものだと学び、その後の人生で、主張すべきは主張し、我慢すべきは我慢するということを、幼児期に学び、身に付けるはずなんです。これが、今は、なくなってきているわけで、先ほどのゴリラの話にはすごく共感しました。

山極

もう一ついえばね、少し前には、表向き教育とはいわれていないが、学ぶ場はたくさん用意されていたんですね。高田さんのパーもそうなんですが、教育の場だったんです。私の学生のころも一杯飲み屋のママがいて、自分の悩みを打ち明けて、こうすりゃいいと教えてもらったりして大人になっていったというプロセスがあって、何か、家族、学校ばか

りでなく、いろんなどころに教えてくれる人がいた。それが社会の優しさであり、一つの仕組みだったのではないかと思ったんですがね。それがまあ、単一的になっていった。個人と何かをつなぐものばかりになっていったというのが、現状ではないかと思っています。

高田

場の話が出ましたが、「酒場のママ」って、なんで「ママ」っていうのか。あらためて考えれば「酒場のおばさん」に過ぎないのに、それを「擬似的にママと見なす」わけでしょ？そこに「デキの悪い（擬似的な）息子」が、夜ごと、やってくる。で、愚痴をこぼしたり、悩みを聞いてもらったりして、元気を回復して帰っていく。酒場のママは、ただ擬似的な息子の話を聞いてあげるだけなんですけどね。

まあ、心理療法師の河合隼雄さんも、クライアントの話を聞くだけだったようですから、ひと昔前の酒場のママは、一種のサイコセラピストだったんででしょう。

ところが昨今の酒場では、



「そんな鬱陶しいこと、ごちゃごちゃ言うてんと、カラオケでパッと行きまひよ」

と背中を叩かれて終わり、でしょ？ 結果、本職のサイコセラピストが商売になってきた。実際、精神科のお医者さんの数も、

ずいぶん増えているようですし……。

ま、それはそれとして、後のワールドカフェのテーマかと思いますが、家族という社会の最小単位が壊れ、互いに共感できる組織がなくなったら、これから社会はどうなるのでしょうか。家族に代わる組織は、果たしてありうるのでしょうか。このあたりについて、山口さんどう思われますか。

山口

その前に、ちょっと山極さんに聞きたいことがあるんですが、先ほど、弱気を助け、強気をくじくお父さんゴリラの話がありました。これって、お母さんゴリラもそれをやるんですか。

山極

お母さんは、自分の子供がかわいいんです。自分の子どもを助けたい。でも、お父さんはちょっと子どもから距離を置きます。子どもたちを対等に付き合わせたいと思うんですね。

山口

ということは、そこには文化があるということになりませんか。お父さんゴリラが全体の和を保つためにやっているってことは、欲望から来てないですよ。そうやって育てられると、子供がお父さんになったら、やはり連鎖的にそれをやる。文化ではないでしょうか。

山極

文化っていう定義が合うかどうかはわかりません。みんなの合意でつくられる計画性というのが、ぼくは文化と思っているので、もし父親というのがそうであれば、文化に近いと思います。

山口

さて、高田さんの「家族に代わる組織はあるのだろうか」というご質問です。原発事故以来、日本がすっかりへたれちゃったみたいなところがありますよね。それでも私は、リスクにチャレンジして、それに打ち勝った者を称える社会であってほしいと思います。我慢の文化はよくない。強い者が現れる社会がよくないとは、決して思わない。いろいろ競争して、最終的に勝ち残ったものは褒め称えるような社会、もちろん、弱い者は助けられる。そういう社会に日本になってほしいと思うんです。そのためには、家族を超える市民社会が必要だと思います。きょうのお話を聞いていて、日本は、まだまだゴリラの社会に近いなと思ったのですが、市民革命を経たヨーロッパは、やはり一皮むけているなあと思いました。

高田

堀場さん、何かありますか。

堀場

いつも思うことですが、人間はあまり進歩してないということですね。50万年、100万年前とほとんど変わっていないし、これから、100万年生きていてもあまり変わらないと思う。家族とか社会とかいろいろあるけども、なにか行き過ぎては回帰して、昔の状態に戻してまた行ってを繰り返す、ある範囲の間を行き来するというのが、私の最近思うことなんですね。

事務局

では、会場の皆様からご意見を伺いましょう。

木村美恵子（タケダライフサイエンス研究所所長）

ゴリラの母親は、具体的に子どもを産んで、小さい間におっぱい飲まず以外に、メスの役割はなんでしょう。



山極

お乳を飲ませる3年間ぐらいは、母親と子どもはべったりですよ。子どもは母親のそばにすることが一番幸福。でも、子どもは、母親から別れていかなければなりません。オランウータンもチンパンジーもなかなか乳離れができないが、ゴリラは、託児をするので、どっちかという勇んで離れていきます。そうなると、子どもの責任は

オスに移りますから、ほかの群れに移ったりして、メスは、恋をするんです。ある意味ともフリーに動いている。母親の時期と、恋をしている時期は明らかに違うということですね。

柴田一成（京都大学花山天文台長）

あるところで、ゴリラには言語がないと聞いたのですが、どうやってコミュニケーションしているんでしょう。特に、山極さんはコミュニケーションできるのか。文法なんかなくても、人間とはだいぶ違う方法で、なにか言葉を発してコミュニケーションをしているのですか。

山極

人間は今、言葉なくしては生きられません。しかし、人間の身体能力からすると、言葉はとても新しいものです。まだ、できてから数万年しか経っていませんから。それまでの、数百万年間は言葉なしでやっていたわけですね。そっちの方が体に残っていると思うんです。ゴリラと人間は、体の大きさは違いますが、特徴はそう変わらないですから、身体によるコミュニケーションは似ていて、体を使えばできるし、実際できているわけですね。それは何かというと対面して顔を合わせるコミュニケーションなんですね。人間は目を見、ゴリラは顔全体を見る。ただ、われわれは、言葉なしに相手に何かをわかってもらおうとすると、とても大変です。これは言葉が情報というものを担保し、指示するからです。でも、情報なしに何かを伝えようとする、体をいろいろ動かさなくちゃいけないわけです。それは全体的なメッセージとして伝わる。



相手の心を動かすということでは、言葉より体を動かす方が通じるわけです。また、体を動かすより、情報を担保しない音楽の方がよく伝わるんですね。だから、ゴリラの声というのは、極めて音楽的です。ゴリラにハミングというのがあるのですが、非常に音楽的に聞こえ、それは彼らの感情がよくわかる。われわれが歌っている声を聞いて、犬や猫など身近な動物が反応するのはそのせいだと思うんですけど、言葉より歌に反応すると思います。

横田 誠（京都大学学際融合教育研究推進センター）

ゴリラの子育てなんですが、オスは、自分の子どもしか面倒見ないのか、メスが連れてくれば父親として育てるんでしょうか。これを伺うのは、ヨーロッパではフランスで顕著なように、婚外婚が多くなっている中で、母親が子どもを連れてくるケースが多い。で、父親のあり方がどうなっているか気になっているんですね。日本でも、特に、東京のような大都会では、父親がほとんど家にいないのが当たり前になっている。これが一般化している状況で、子どもたちに対する父親の役割や機能をどう考えたらいいのか、大きな問題だと思うんです。

山極

実は、きょうお話ししなかったゴリラ社会の暗い側面として、「子殺し」があるんです。どういう時に起こるかという、連れ子をしてメスが入ってきた場合です。自分の子供でないことははっきりしている。ゴリラの場合、その群れのメスはそのオスとしか交尾をしませんから、ほかのオスと交尾するチャンスはありません。メスは、自分の所属する群れのオスが死んだ時、行きどころを探し、乳飲み子を連れてほかの群れに移るんですね。その時、その子どもは、必ずといっていいほど殺されます。だから、まず、移籍して、そのオスと交尾して子どもを産まない、そのオスは自分の子供としてみなさない。ただ、自分の子供でなくても、その群れのオスの子どもなら育てることはあります。実際、子どものDNAを調べると、育てているオスの子どもではないことがあるので、「自分の群れ」という意識が、その子育てを支えているかもしれない。ゴリラがする連れ子殺しは、人間でも起こりうるんだろうと思います。最近の、継親による連れ子の虐待にも引き継がれているのかもしれないね。

塩田 浩平（京都大学大学院思修館設置準備室教授）

最近レストランに行くと気がつくことをちょっとお話しします、若いカップルはよく話しているんですが、話さないグループがある。それは、年ごろの子どもとその親の組み合わせと熟年の夫婦です。子どもは、いやいや一緒に来て食わせられていると思っているのか…。ゴリラから見ると、これはどういう社会なのでしょう。

山極

ゴリラの社会では、オスは歳をとっても群れから追われないんですね。若いのが台頭してくると、身体的に劣るので若いオスとは喧嘩すると負けます。しかし、子ども、孫とかは、年寄りのオスの方が好きなんです。メスは、さっき話したように、子どもを連れてほかの群れに移れませんから、子どもが残り、歳をとるほど子供が群がってきます。老境に達したオスは、子どもと本当に仲がいい。日本の現象ですが、これまで、夫婦だけにされるということがあまり起こっていなかったんじゃないか。それで、若い時のように、二人でどっかに行ったりすると、戸惑ってしまうのではないのでしょうかね。こないだ、ちょっと産婦人科の医者先生に聞きましたが、「産後リスク」ということをおっしゃっていました。男女のパートナーに対する信頼感の話なんですが、産前産後が一番高く、子どもが大きくなるに従ってどんどんその信頼感が薄れていくんですね。それも、女性の方が、男の倍ぐらいのスピードで薄れていくんだそうです。で、結局、日本の家庭は、「母子家庭」になっているんじゃないかと思うんですね。父親は家にいないので、母子の絆ばかりが強まって、もう父親は邪魔だというようになっている。それが今の日本の社会なんじゃないのかな。

事務局

では、この後のワールドカフェですが、山極さんからお話をいただきたいと思います。

山極

きょう、ちょっと話に出なかったんですが、日本の会社は家族のようなイメージで経営されていたフシがある。そういうものがこれからも日本の社会の中で続いていけるのか。あるいは、家族はもういない、別の考えで組織は組み立てて行ったほうがいいのか。自分の職場を念頭にお話いただきたいと思います。



「家族の由来に関する誤解～ゴリラから学んだこと～」

日本の企業の特徴といえば、家族的経営と言われてきました。ところが、グローバル社会の到来とともにこの「家族」という概念が組織からなくなろうとしています。企業にとって家族的経営とは何か、またこの変化をどう考えるかなどについて対話しました。



▽第一テーブル報告 三浦充博（庵営業チームリーダー）

家族と会社。企業というのは、上手にマッチングするかどうかをベースに話し合いました。いろいろな地域でどうだろうということも話が出て、京都なら文化もあるので家族的経営ができそうということになったんですが、ま、スケールとして、5、6人ぐらいだったら意志の共有ができてうまくいくなという意見がありました。この、お題をもらって、はっと、思わされたのは、家族と企業を一緒に考えてみなさいというのが、日本的だということでした。常に、背負っている問題であると思うんですが、これをどう考えるか、まとまらず、です。結論としては空中分解でしたが、こういうことを話し合える相手が会社の中にいるというのが、一番大切だということが私の思ったところです。

▽第二テーブル報告 山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授） 内崎 直子（大阪ガス近畿圏部）

日本の企業は、家族的な経営、人の顔が見えるような会社というのが大きく育ってきているという歴史的な背景があります。その中で、昨今、確実に利益が出るもの、経済性を優先するようになってきている傾向があるのですが、その対極の家族に通じる「ファジー」と「信頼度」と「顔の見える」ということを大切にすべきだということになりました。つまり結論は、家族的な経営をするべきということです。ファジーと信頼度と顔の見えるということなんですけど、会社の方からすると、顔の見える関係をどうやって保っていくの方が重要なんです。そして、結末としてはファジーなものを育てることになるだろう。確実なものばかり追い求めていくと、硬直化して自由度が失われる。ということはファジーなものが必要になってくる。ただ、ファジーなものを担保するには信頼がなければいけない。



家族がファジーなのは、なぜかという、みんなが無条件に信頼できるからです。会社の中で信頼できる関係がつかれるというのは、まさに顔の合わせられる、顔が見える関係ってことなんだな。ということは結果として、家族的なものをうまく持ち合わせ、ファジーさをきちんと未来につなげられる会社がいいんじゃないかな、ということになった

わけです。

▼第三テーブル報告 赤島 貞宏 (同志社大学ビジネス研究科)

渡辺 実 (花園大学社会福祉学部教授)

日本の企業は家庭的かというところから、家庭的とは何かという話になりました。それで、家族的経営の反語としては欧米化ということになったのですが、欧米の企業にもイタリアとか家族的なのもあるぞということになって、その後、俄然、京都の企業の話で盛り上がりまして、なぜ京都の企業が強いのか。渡辺先生が、東京から京都の大学にこられたんですが、なぜこんなに京都は強いのかでお話になりました。ちょっと先生一言お願いします。



(渡辺) 京都は閉鎖的と思われているかもしれないが、渡来人はじめ、いろんな人が京都に来て、それを取り入れて発展してきた。ただ、京都には、常に核になる人たちがいて、安定するところがあったので、いろんな人やもの、考えなどを取り入れることができたんじゃないかということを申し上げました。

いやあ、京都は最高ということですよ。

▼第四テーブル報告 山本勝晴 ((浄土宗西山深草派 僧侶))

まず、企業は家族的であるべきか、ということから始まり、その中で、いろいろな会社があるが、常識のない若者が多い。これは、親のしつけができていないためであるし、会社でも、社長がしっかり怒ることをしないからだという指摘がありました。さらに、若者が飲み会に参加しないということが顕著になっていますが、彼らは、行くメリットがないという。それはどういうことかということ、見習うべき先輩がいないのではないかということ。これ、ちょっと身につまされました。それで、カンパニーというのは、パンと一緒に食べるという意味らしいので、言葉からしても会社は家族的でなければいけないんだなという話もありました。結論としては、会社、組織の有り様は、これからの日本にとって家族的であっていい。ただ、条件として、社員も独立とリスクを背負う考えを持つべきだというものでした。社長を先頭に、利益を上げるということを共通の目的に、本音で付き合えることで、いいサイクルが生まれるのではないかということに。



長谷川和子 (クオリアAGORA事務局)

先ほど退席された堀場さんは、家族的な経営は、200人ぐらいならできるのではないかとおっしゃっていましたが、1万人いても、部とか課で50人とか100人の顔が見える組織にしていけば、それが可能になると思われまます。研究施設でも、同じステージで議論できたはずなんです、それができなかったのがちょっと残念でしたね。

ところで、きょうは、ニワトリの胚を使って発生生物学を研究されている京都大学の高

橋淑子さんが初めてお見えになったので、ちょっとお話していただきます。

高橋 淑子（京都大学大学院理学研究科教授）

山極先生には、いつもこき使われている高橋でございます。発生生物学をやっております、今、時のものになっているIPS細胞のもとになったES細胞を日本で初めて培養いたしました。山極先生に誘われ、参加しましたが、いろんな意見が出て楽しかったです。それで、家族的企業ということで話し合いがされ興味深かったわけですが、ただ、「家族的」という定義を、ちょっと考えていただいたら面白いと思います。女性の立場から申し上げますと、世界では、家族的ということが必ずしも前向きではないことが歴史的にもあったでしょうし、今も一部の宗教ではあるのかなと思ったりします。



もう一つ、最近の若いものは、と私もよく思いますが、私、奈良に住んでいるんですが、平城京を掘ると木簡がたくさん出てきます。そのころ、平城京の役人はとてもダラダラしていたらしいのですが、その役人が木簡に「最近の若いものは」と文句を書いているんですね。そうか、最近の若いものは、というのは、おそらく人類としての知恵が出てきたころから、いつの世もそんなことをいってきたんだなと思い、私も、そういうふうになる時は、このことを思い出すことにしています。今の自分の常識は常識ではないんだと。奈良に住んでいると、そういうことを考えるようになるんです。ちょっと、生意気なことをいってしまいました。きょうはありがとうございました。

山極

高橋さんから、今の若者はという話が出ましたが、最近の若いものはタメ口をきくというんですが、それがよくわからなくて、娘に聞いてみたんです。それはね、さん付けで呼ぶとか、やけに親しげな言葉で語る。これ、若い者にとっては、信頼を担保するものなんです。家族には限定されず、むしろ友達同士で、やけに馴れ馴れしい。彼らにはこれが重要なんです。ここに家族の意識はないんですよ。昔はね、おとっちゃん、おっかちゃん、それに兄弟のような口をきくというようなことだったんだろうけど、今はそういう縦筋は通ってなくて、横筋なんです。そういうふうに若い世代は思っていて、それがすごく大事な世の中になってきたということだと思えます。それを作ったのはIT社会であり、いうならば、今のコミュニケーションが通じる社会なんです。つまり上の回路は閉ざされてしまったのではないかと。そこに世代間のギャップをうまく参入させていかないと…。

きょう、家族が重要で、それに特徴的なファジーや信頼、顔が見えるということを経営に取り込んでいくのが重要だねという話になったのですが、彼らは、家族という話なしに、もう、そういうものをつくりつつあるのかもしれないと、私は思っています。面白いテーマなので、ぜひ、これからもクオリアで発展させていって欲しいものだと思います。

（編集 辻 恒人）